ヘーゲル『精神の現象学』の生成の時期について

松村　健吾*

On the time of becoming of Hegel's "Phenomenology of Spirit"

Kengo MATSUMURA*

哲学の古典的作品であるにもかかわらず、あるいはそれだからこそ、『精神の現象学』に関しては今もなお様々な問題が取りざたされている。最初は『意識の経験の学』と呼ばれていた著作を半分以上書き進めていった頃からヘーゲルの頭には別の表題『精神の現象学』が浮かんできたようである。時期としては1806年の９月頃のことである。表題の違いを大きな問題とみる見方もあれば、さしたる問題はないとみる見方もある。この表題問題と関連して、本文中での見出しの問題もある。ヘーゲルは最初はローマ数字で見出しを付けていた（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、等々)。ところが執筆し終えた最後になるとヘーゲル自身の手になる詳しい見出しが先頭につけられて、大きく「A、B、C」等々の見出しが付けられた。こちらも見方によっては大きな問題を提起するものであるが、軽く見過ごすことも可能でもある。これらの問題と並んで更に重要なのは、この著作の構想が何時頃からヘーゲルの頭に浮かんできて、書き始められたのかという問題がある。私は今回はこの問題を検討してみたいと思う。

『意識の経験の学』の構想の誕生については二つの見解が対立していると言える。ローゼンクランツは『ヘーゲル伝』(1) の中で、『意識の経験の学』の構想は既に1804年に始まっており、更にはその同じ年に出版を計画していたと述べている（Ros.214)。これに対して20世紀の代表的なヘーゲル研究者ヘーリンクはその書が極めて短い時間に(1805年冬から1806年の間）突然構想され、書き上げられたものだという見解を示した(2)（1934年の第三回Hegelkongressでの発表)。F.Meiner社の哲学文庫版の『精神の現象学』の編集者ホフマイスターもその見解をそのまま受け入れていた(3)。それに対して20世紀の後半には、ペッゲラーなどがヘーリンクの見解を批判し、『精神の現象学』はイエナ時代の初期から構想されていたのだという見解を述べている(4)。その理由はイエナ時代の初めから、論理学が形而上学への導入として構想されていたからだとされ、次のように結論されている。「論理学と形而上学は、ヘーゲルがそれをイエナ時代の最初に講義しているように、それ自身既に現象学であった。」(H-S.Beifeft3, 40p）驚くべき発言であるが、時代はそれを受容した。こうしたヘーリンク説に対する批判は同時にこの著作の「理念」は何かという問題とセットになって『精神の現象学』の「理

*大東文化大学名誉教授

念」が盛んに論じられることになった（例えば、学への導入であるとか、新しい歴史哲学だとか、新しい形而上学だとか、存在論だとか、等々）[5]。この流れは現在のヘーゲル研究にもそのまま受け継がれている。ヘーリンクの説は古い謬説として葬り去られている状況である。

（1）『意識の経験の学』は1804年から構想されていたのか？

『精神の現象学』の生成の時期についての現在の代表的な説はボンジーペンのものである。F.Meiner社の「哲学文庫」は1988年にホフマイスター版に代わる新版を出版した[6]。その版の序文にボンジーペンの長い解説が序文として掲載されている。彼はここでローゼンクランツの説をそのまま受け入れており、『意識の経験の学』は1804年頃から構想されていたと主張している。その根拠として彼は『1804/05年の論理学・形而上学』における「論理学」と「形而上学」に関するヘーゲルのそこでの説明を挙げている。前者においては弁証法が支配し、後者においては弁証法が克服されているとヘーゲルは主張しているが、ボンジーペンによればこの主張が自然的意識の立場と我々哲学者の立場を区別する『意識の経験の学』の構想と重なるからだという（同書、XXV-XXVIp参照）。ボンジーペンのこういう手法、つまり『精神の現象学』の内から何らかの構想を取り出して、それと類似の構想をヘーゲルのそれ以前の草稿の内に読み取ろうという手法は、ペッゲラーの手法と同じものである。相違はペッゲラーでは1801年であった『精神の現象学』の構想の誕生が、ボンジーペンでは1804年だということだけである。こうした手法で『意識の経験の学』の起源を求めてゆくことが許されるのであれば、それは学生時代の「民族宗教」構想に、更には少年時代の日記にまで遡ることも可能であろう。否、更に父祖の時代の精神文化（例えばシュワーベン敬虔主義）にまで遡ることも可能であろう。ともかく、それはある著作の理念や構想といった漠然とした単純性に訴えて、その著作の生成の時期を想像する手法の限界を示している。大切なのはヘーゲルが『意識の経験の学』の構想を持ち始めたことの明瞭な資料的な証拠である。ローゼンクランツは何らかの資料的な根拠から1804年説を唱えたのかもしれないが、その資料が本当にあったと仮定しても、現存はしていない。彼が示している証拠で興味深いのはゲーテの『ラモーの甥』の翻訳書である。この翻訳書はヘーゲルの『精神の現象学』で何度も題名を挙げられて紹介されている数少ない著作の一つである。この書は『精神の現象学』の成立と明らかに関連している。ところがローゼンクランツはこの書の成立を「1804年」と明示しているのである（Ros.209p）。明らかな誤りである。ゲーテのその翻訳書は1805年の５月に出版されている。もしかしたらローゼンクランツのこうした思い込みが彼の1804年説を誘導したのかもしれない。明らかなことは1804年にはヘーゲルが『意識の経験の学』を構想した証拠資料は何もないということである。

ただしGW７巻の付録に収録されている「体系への二つの注」（GW7, 343-347）を『意識の経験の学』の構想の始まりと見なす説もある[7]。これは５ページほどの長さの断

片であり、欄外注もついているものなので、おそらくは講義で使用した草稿と思われる。成立は1803年から1804/05年の頃と推定されているが、これではあまりに幅がありすぎるので、更にいくつかの推測がなされているが、おそらくは『1803/04年の自然哲学、精神哲学』(GW 6巻)と同じ頃の『論理学・形而上学』の草稿の一部であろう。「体系への二つの注」は文字通り二つの注からなっていて、第一の注では、「哲学体系の始原」の問題が取り上げられている。言うまでもなくこの問題は後の『論理学』でも取り上げられている大きな問題である。草稿の方ではヘーゲルは始原は仮象であり、哲学は自己自身でこの仮象を廃棄しなければならない、としている。結論としては、始原は最後のものであり、最後のものが又始原である、とされて終わっている。第二の注は、「吐き気を催すほどに繰り返された」カント哲学による、認識と認識の対象とを区別する見方が批判されている。そうした見方が「確信」とか、「知」という言葉で言い換えられてもいる。ともかくここでのヘーゲルにとっては、このように認識と認識の対象を分離する見方は、「即且対自的に空無なもの」であり、「哲学の理念とは、そこにおいてはこうした分離が絶滅されること」に他ならない、と断定している。こうした真実の認識をヘーゲルは「絶対的認識」「絶対的確信」と呼んでいる。それに対して他の者たちは「知それ自身ではないような確信」を持っていて、いつまでも分離にこだわっている、として文章は途切れている。この辺りにヘーゲルは欄外注をつけていて、経験の問題を取り上げ、「概念把握された経験」つまり区分にこだわる見方と、「純粋な直接的な経験」つまり両者を統一的に捉える自分の見方を区別している。「概念把握された経験」はカント的な見方として低く評価されている。とまれここでの「純粋経験」を根拠にして、原崎道彦は『意識の経験の学』の構想が始まっていると解釈しているのであるが、それは、ボンジーペンの説と大差ない漠然とした構想に訴える説であるとともに、草稿の内容把握に誤りがあると思われる。この草稿で取り上げられているのは、認識主観とその対象である「物自体」の関係であり、物自体は認識できないというカント哲学の結論に苛立つヘーゲルが「絶対的認識」を旗印にしてそれに立ち向かう姿である。「純粋経験」について詳しい説明は無いが、それ自身が絶対的認識であることは明らかであり、カント的な概念の混入を排除した、まさに「純粋な直接的な経験」であり、つまりは経験を超越した思弁、あるいは純粋なイデアそのものなのである。それはイエナ初期の言葉で言えば、「知的直観」「超越論的直観」と言い換えてもいいものであろう。ヘーゲルは自分のこうした態度を『1804/05年の論理学・形而上学』においては既に乗り越えている。そこでの「形而上学」の冒頭はこう述べられている。「論理学は、相関関係が止み、相関の各項が対自存在するものとして分かれ落ちるところで、終わりとなる。」(GW7, 126) この対自存在、つまり独立に存在する両項が認識主観と物自体である。このようにカント哲学の登場をヘーゲルは形而上学の始まりとみなし、それがフィヒテの自我によって止揚されてゆくものとして「形而上学」本論を展開してゆく。ここでヘーゲルはカントによる両者の分離に賛成するわけではないが、その立場を根絶して「絶対

的認識」に訴えるという立場はもう採用しないのである。ヘーゲルの「認識」はもはや「絶対的認識」ではなく、「運動の絶対的に否定的な統一」(GW7, 127) へと向かっているのである。

(2) 1805年の諸々の資料について

以上見てきたところから、1804年にはヘーゲルが『意識の経験の学』を構想した資料的証拠はないことが明らかである。かくして、『意識の経験の学』の構想・作成の証拠資料となり得るもので現存しているのは、三つの断片だけである。これらはGW 9巻の付録に収録されている (GW9, 437-443)。それらに仮に①、②、③という番号を付けておく。①はDas absolute Wissenで始まる8行ほどの断片である。②はa) göttliches Rechtで始まる5行ほどのものである。③は6ページにわたるかなりの長い草稿である。これは現在では1806年の夏頃の成立と推定されており、『意識の経験の学』の成立開始時期に問題提起をする資料ではない (ただし最近、興味深い説が出されているので、後で触れることにする)。だから成立の時期に関しては①と②が問題である。これらは共にフォス宛の手紙への下書きの第三稿が書かれている紙片と同じ紙片に書かれているので、1805年5月あるいはそれ以前の頃の成立と推定されている (GW9, 465)。内容的には両者とも『精神の現象学』の下書き原稿の断片と見なしていいものである。簡単にその内容を見ておこう。①ではこう言われている。「かくして絶対知は先ずは立法的理性として登場する。人倫的実体自身の概念の内には意識と自体存在の何らの区別もない。・・・しかしながら次には実体のもとに規定性が現れてくるから、・・・意識と自体存在の間に区別もまた現れてくる。しかしこの自体は人倫的実体自身であり、つまりは絶対的意識である。」(GW.9, 437、強調は松村) ここに言われている「立法的理性」は現行の『精神の現象学』の理性章Cのbにそのまま表題として登場しているものであり、この断片がこの著作の準備段階に成立したことは確実である。この草稿の細かい解釈については今は立ち入らないことにするが、ただし「絶対的意識」という用語が古めかしいものであるのが気にかかる。絶対的意識とは『1803/04年の精神哲学』の頃に使用されている用語であり (GW6, 272, 274)[8]、『精神の現象学』では、一か所を除いて、全く使用されない用語である。『精神の現象学』にとっては「絶対的意識」は死語なのである。そこでは「〔対象〕意識」が主人公であり、意識の立場を超越した「絶対的意識」は不要である。そこでは意識の立場を超越する「自己意識」というもう一つ別の主人公が登場しているのである。ところがその「絶対的意識」という言葉が『精神の現象学』の中で一度だけ使用されている。その場所は「理性章Cのc. 査法的理性」の第8節である。人倫的「法則が自己意識の絶対的意識が抱く思想である」とされている (GW9, 235)[9]。自己意識と意識とが肯定的に連続する何とも形容矛盾的な表現ではあるが、断片①の思想がかすかに『精神の現象学』の片隅に生き残っていることが分かる。かつての自分の思想の理念であった「絶対的意識」を完全には抹殺できないヘーゲルが

いたようである。②の断片は「ａ）意識の神的な権利・法。意識は人倫的本質存在として義務への関係である。・・・」とある短いものであるが、こちらも人倫と密接に関係する段階である。①と②は以前はひとつながりの草稿と見なされていたが、アカデミー版の編集者は一応別のものとしている。ただし内容的な近さは否定できないものである。いずれにしても①も②も著作の後半部分に関係している。だからそれらの成立の年代の推定が正しいとすれば、ヘーゲルは1805年の初め、あるいは中頃からこの著作の構想を練り始めていたと言えるであろう（ただし私はこの推定自身に若干疑問があるので、この草稿は、構想のレベルでもせいぜい1805年の８月頃であろうと想像している）。

ところでそれら断片の成立年代の根拠となったフォス宛の手紙であるが、残されているのはヘーゲルの下書き三種のみであり、手紙そのものは現存しない。フォスからヘーゲルへの返信は1805年８月24日付のものが現存する。ヘーゲルはフォスへの手紙の下書きの中で、自分がイエナで三年間、哲学体系の構築に励んできたこと、そして今年の秋には哲学体系を詳述・出版するつもりだ、としている。そして哲学体系としては思弁的哲学、自然哲学、精神哲学、自然法を挙げている。この発言は1805年夏学期のヘーゲルの講義要項「全哲学体系、思弁的哲学（論理学・形而上学）、自然哲学、精神哲学、近く出版されるテキストにより」と、完全に一致する（自然法に関しても、テキストにより、とある）。ヘーゲルは下書きの中で自分の哲学を「新しい哲学」とも呼んでいるが、この下書きの中では『意識の経験の学』の名前も、それらしい構想も出ていない。この段階でのヘーゲルの哲学体系は以前からの構想と変わるところのない三部構成の体系である。もしもこの段階で『意識の経験の学』の草稿を既に書いているのであれば、何故にヘーゲルがそれをフォスに宣伝しなかったのか全く理解できない。ちなみにフォスはホメロスの翻訳者として著名な文学者であり、この年にイエナ大学からハイデルベルク大学に移っている。ということで私としては、①と②の年代推定に対して少し懐疑的であるが、私自身も具体的な証拠を持たないからして、これ以上は主張しないことにする。ただし私は1805年の段階でヘーゲルが『意識の経験の学』の草稿を書き始めていたという想定には反対せざるを得ない。書いたとしてもせいぜいここに見られるような断片的な構想メモどまりであろうと推測している。というのも私はヘーゲルが1805年の前半、あるいは中頃から下書きを書き始めたと想定した場合の、大きな問題点を無視することは出来ない。私の疑問は次のようなものである。

ヘーゲルの『1805/06年の自然哲学、精神哲学』の草稿（GW８巻）に関してであるが、この草稿が何時書かれたのかは明らかではないが、アカデミー版の編集者たちは1805年の秋から1806年の冬頃と推定している。しかし1805年の夏学期には講義題目として掲示されているのであるから、その年の初めから書かれたと推定してもいいであろう。キンマーレはこの年の夏学期には自然哲学と精神哲学は講義されず、論理学だけが講義されたとしている。その想定の根拠として彼は1805年夏学期の「論理学」の聴講生リストを示している（H-S.Bd4, 62p）。聴講生リストが存在する以上そこで「論理学」が講

義されたことは確実であろう。ただしそのリストで気になるのは、そこでは「論理学」の講義が「三時から四時」に開講されているが、講義要項では全哲学（論理学、自然哲学、精神哲学）の講義は「六時から七時」となっている（同書、54p)。この二つは同じ講義なのであろうか、別のものなのであろうか。同じだとした場合に、何故に講義時間や講義内容が変更されたのであろうか。更に疑問となるのは1805年の夏学期にヘーゲルが「論理学」の講義を行ったとすると、ヘーゲルはどの草稿を基にして講義したのであろうか。『1804/05年の論理学・形而上学』をそのまま使用したのであろうか。あるいは新たに「論理学」の草稿を書いたのであろうか。新たに書いたとすれば何故その草稿は断片すらも、残っていないのであろうか。まだまだ精査しなければならない問題が残されていると言わなければならない。また1805年の夏学期にたとえ「自然哲学、精神哲学」の講義を行わなかったとしても、講義の、更には出版の準備のための草稿を書かなかったと断定することは出来ないはずである。確かに『1805/06年の自然哲学、精神哲学』の講義は1805/06年の冬学期にも行われることになっていたが、聴講生リストは残っていない。当時イエナ大学の学生であったガブラーはこう報告している。「私がヘーゲルを聴講した最初は1805/06年の冬学期であった。講義は「純粋数学」と「哲学史」であった。前者は人数は少なかったが、後者は3-40人いた。[10]」ガブラーの報告の通りだとすれば、この冬学期には「自然哲学と精神哲学」は講義されていないことになる。私は『1805/06年の自然哲学、精神哲学』の草稿は1805年の夏学期の前から書き始められたものと想定する。そもそもフォス宛の手紙の通りだとするなら、ヘーゲルは秋には学の体系全体を出版するつもりなのである。グズグズしてはいられなかったはずである。いずれにして1805年の夏の頃のヘーゲルは論理学、自然哲学、精神哲学の原稿を一刻も早く仕上げなければならないのである。フォス宛の手紙の草稿の裏側に「差し迫った仕事があるために講義を今週いっぱい延期する」という学生向けのメモが書かれているところからも（Br, 1, 457p)、ヘーゲルが哲学体系の原稿の仕上げをいかに急いでいるかがうかがえる。なおキンマーレたちはその「講義」を1805年の夏学期の講義だと解釈している（冬学期の可能性もあろうに)。興味深いことにこのメモは、表面化してはいないが、先に見た①と②の断片の成立年代の推定に実は大きく関与しているものなのである。既に触れたようにフォスのヘーゲルへの返信は８月24日付である。だから常識的にはヘーゲルが手紙を書いたのは８月、あるいは内容が就職依頼なので７月かもしれない。ヘーゲルの手紙の下書きもこれに合わせて書かれているので、８月前後のものと想定されるはずである。しかるにそれが５月と想定されているのは、それは講義の開始を遅らせるというこのメモに由来している想定なのである。夏学期の講義は５月から始まるのでこのように想定されているのである。だからこの用紙には『精神の現象学』に関係する①と②のメモ、フォスへの手紙の下書きの第三稿、そして講義延期の掲示の下書き二種類[11]、が書かれているのである。この用紙の現物は現存せず、写真版のみが現存するようである（GW8, 358参照)。三種類の文章の順序の前後はどうなって

いるのかは不明であるが、どう見ても貴重な文書とは言えず、まさに雑多なメモ帳という感じがする。ここに書かれている雑多なメモの成立を同時期に想定する必要はないのではなかろうか。ともかく、こんな忙しいときに、万が一その構想が湧いていたとしても、『意識の経験の学』の原稿など書く暇はなかったであろう。にも拘らず、時はヘーゲルを休ませてはくれなかった。1805年８月にはF.J.ガルがイエナ大学で「頭蓋論」の講義を行うという事件が起きるのである(12)。『ラモーの甥』といい、ガルの「頭蓋論」といい、『精神の現象学』の素材がヘーゲルの身辺に集い始めているのも否定できない事実である。ヘーゲルの精神はまさに発酵状態にあったのである(13)。そうした発酵状態の中でそれらの断片的なメモが残されたのであろう。

1806年の夏学期には、「自然哲学と精神哲学」は聴講生リストがあるので、明らかに講義されている。『1805/06年の自然哲学、精神哲学』の欄外注はこの講義の時のものと思われる（本文は私の推測では1805年の前半から後半にかけて書かれている）。問題となるのはこの『1805/06年の精神哲学』がそれ以前のものと同様に「**知性Intelligenz**」から始まっているということである。「知性」は主観と客観の同一性の意識であり、経験的な「意識」のような主観と客観の対立の意識ではないのである。だからヘーゲルはここでの精神哲学においては経験的意識を自分の哲学体系の中から排除しているのである。こうした態度はイエナ時代の初期からの態度であり、主観と客観の同一性を自己の哲学の原理とするヘーゲルにとっては、「意識」は視野の外にあったのである。イエナ期のヘーゲルにとっては「意識」は取り上げるに値しない非学問的な立場だったのである。もしもヘーゲルが1805年の段階から『意識の経験の学』の本格的な準備を始めていたのであれば、どうして「意識」に対してこのような不当な振る舞いをすることが出来たのであろうか。『意識の経験の学』の草稿が1805年から書かれていたと考えるならば、この学と『1805/06年の精神哲学』とが両立する道はないのである。両者が共に存在するためには、時間がずれていなければならないのである。つまり『意識の経験の学』の草稿は『1805/06年の精神哲学』の草稿に遅れて、しかも「意識」に対するヘーゲルの関係態度の大きな変化の下で、書かれ始めたと考えるのが妥当であろう。そうだとすれば、次のような推測が可能ではなかろうか。

ヘーゲルは『1805/06年の自然哲学、精神哲学』の草稿を1805年の春頃から書き始めた。それと同じころに「論理学」の草稿も新たに書いていたかもしれない。しかし1805年の５月頃『ラモーの甥』が出版され、８月にはガルがイエナに登場するという事件などもあり、更にはナポレオンの新しい動きも重なって、ヘーゲルの精神はかつてない大きな衝撃に見舞われ、超越論的観念論の枠を突き破る新しい視点、自然的意識を学へと導くという『意識の経験の学』の構想が湧いてきた。その構想のメモを夏頃から書き溜めて、1805/06年の冬学期には講義の数も減らして、つまりこれまでの自分の哲学体系、論理学・自然哲学・精神哲学の講義は全て中止して、この体系に先行する『意識の経験の学』の叙述を1805年の末12月頃、あるいは1806年の１月頃から開始した（この点

からすれば、私の意見はヘーリンクの説と同じである)。それ以前に若干の構想があったことは、①と②の草稿から否定は出来ないが、それらは断片的なメモ程度のものであり、下書きと言えるものはなかったと考える他はないであろう。私の想像では、ヘーゲルは断片的なメモだけを頼りに、下書きなしに、一挙に『意識の経験の学』の原稿を書き始めたのである。はっきりしていることは1806年2月には『意識の経験の学』の印刷が始まっているということである。そしてヘーゲルが原稿を全部渡したのではなく、出来上がり次第出版社に渡していたことも確実である。最初に渡したものが全体の半分に満たないものであったことも明白であるからして、1806年の1—2月の段階ではほんのわずかの量のものしか渡せていないのである。

(3)『精神の現象学』の当初の構想

最初に書いた「緒論」において、ヘーゲルは先ずは哲学体系を論じる前に認識について検討してみるという自分の時代の潮流と対決している。それはカントに始まり、ラインホルトなどに受け継がれてゆくものであり、イエナ初期からヘーゲルが対決してきたものであった。その頃は同一哲学の視点からそうした潮流を批判してきたヘーゲルであったが、今は単にそうした高踏的な立場からの批判で事を片付けるのではなく、彼らと共通する「意識」という土俵に降りて立ち向かおうとした。この「意識」の立場を自分の哲学の内に取り入れたことがヘーゲルにとっては画期的なことであった。「意識」とは対立の意識であり、対象と自己は別のものだと思う思惟の様式である。それは主観と客観の同一性を原理とするヘーゲルの哲学とは相容れないものであった。だから『1803/04年の精神哲学』においても、意識を取り上げるときは主客の同一性を原理とする「絶対的意識」だけを自分の精神哲学の内に取り入れたのであり、『1805/06年の精神哲学』においても経験的意識はここで取り扱う題材ではない(GW8, 196)、として排除していたのである。そのヘーゲルが突然自分の哲学の内で「意識」を論じようというのであるから、それは驚きである。それは新しいヘーゲルの登場である。新しいヘーゲルは意識を「自然的意識」と呼ぶ。それはこれまで彼が取り上げてきた「知性Intelligenz」のような高級な主客の統一の意識ではなく、まさに主観と客観の対立を本質とする、その意味で粗野な非学問的な意識であり、少年の頃の彼の愛好した言葉で言えば、「ペーベルたち」の意識であり、その典型は革命前の精神である音楽家ラモーの甥の意識である。ディドロのその書のゲーテ訳を読んだとき、おそらくヘーゲルは強い衝撃を受けたであろう。ペーベルの意識は哲学者(ディドロ)を凌駕していたのである。そのペーベルたちは革命を経験し、今やVolk・民衆・国民として市民社会の内に存在している主人公となっている。この主人公を抜きにしては自分の哲学を形成することはできない、それは自分の哲学の不可欠の地盤である、1806年頃のヘーゲルはそう認識したのである[14]。ただし自然的意識は完全な意識ではなく、極めて不十分な意識である。ヘーゲルとしてはその意識を批判しなければならない。しかし自然的意識をかつ

てのように批判するために批判しても意味はない。自然的意識を批判しながら、彼らに真理への道、つまりは自分（ヘーゲル）の哲学への道を指し示さなければならない。その時、更にかつての啓蒙思想家たちのように「濁れる海に漂える」民衆を救済してやるといった高踏的立場に立つことは出来ない。ヘーゲルは自然的意識自身が身に着けている素質の中に真理へと至る道が準備されていることを示しながら、自然的意識と共に歩む道、『意識の経験の学』の道を選んだのである。自然的意識とは、実は絶対知が自己を外化・放棄した姿なのである。それは一時的に真実態を喪失してはいるが、真理の故郷に帰りつく素質を秘めているのである。自然的意識は遠い人類の過去に存在している意識ではなく、現代社会に存在している疎外された意識である。意識は自らその疎外を克服する力を内包しているのである。それは若い日のヘーゲルの「民族宗教」が、啓蒙思想家による無知な大衆の教育という発想ではなく、民衆自身が自己の尊厳を自覚する道を準備する宗教構想であったことと符合する。フランス革命はもう終わって久しかったが、ナポレオンの進軍によって再びドイツに新しい風が吹き始め、ヘーゲルの情動を新たに深く撹拌し始めたのである。ヘーゲルの祖国ヴュルテンベルクもライン同盟に参加し、ナポレオンの支配下に入ったのである。イエナ初期に『ドイツ憲法論』を書いていた頃のように、ボロボロの「ドイツ帝国・神聖ローマ帝国」に依拠してのドイツ統一の道とは異なるドイツ新生の道が見えてきたのである。新しい勢力は今、北ドイツ（イエナもそこに含まれる）を目指して進軍しているのである。

さて、自然的意識の歩む道をおそらくは、Ⅰ. 感覚的確信、Ⅱ. 知覚、Ⅲ. 悟性として、最後のⅣを「理性」とし、理性において意識は「知性」へと高まり、主客の同一性を捉え、最後に絶対知に至り、そこから「論理学」に移行してゆくという構想が最初のものであったであろう（ただしここにも大きな困難が孕まれていた、後述する）。これなら一挙に書き上げられる、ヘーゲルはそう確信したのであろう。私が想定するこの構想には「自己意識」章が欠けている。「緒論」を読む限りそこには「自己意識」なる用語は一度も登場していない。更には「緒論」の⑧節などに見られる、対自存在、自我に対する非難めいた表現を勘案すると、ヘーゲルが『意識の経験の学』の内に「自己意識章」を設定することなど念頭にないままに純然たる意識論を展開するつもりであったと判断する他はない。ところがヘーゲルは「Ⅲ. 悟性章」を書いてゆく中で、新しい認識を獲得したのである。晩年のヘーゲルが弟子たちに自分の『精神の現象学』を「私の発見の旅」と呼んでいたというのは、有名な逸話である[15]。「Ⅲ. 悟性章」においてヘーゲルが発見したのは「概念」と「自己意識」である。緒論において「概念」は形式的な主観的なものと見なされており、実在性を欠くものとされている。概念は「実在的な知」と対立していた（GW9, 56）。このような「概念」理解は「概念の自己運動」を自分の哲学の立場として標榜するヘーゲルの「概念」とは明らかに異なるものである[16]。「概念」こそが真理のエレメントであり、真理の根源であると認識したとき、ヘーゲルの内で「自己意識」が急浮上してきたのである。ヘーゲルはおもむろに「Ⅳ. 自己自身の確

信の真理」つまりは「自己意識章」を挿入した。時は1806年３月頃であろう。それはナポレオンによるドイツの政治への介入が強まる時期であり、ヘーゲルがクリスティアーナと親密な関係となる頃であり、突然昔の友人シンクレーアがイエナにヘーゲルを訪ねた頃でもある[17]。

先にも述べたように、ヘーゲルは原稿を書き上げ次第、順次出版社に送り出した。その具体的な詳細を再現することは不可能であるが、1806年の何時頃、どの部分を書いていたかを当時の手紙から推測することは可能である。私は『ヘーゲルのイエナ時代　生活編』で大雑把な推測をしておいた。その推測に今一つの興味深い事実を追加しておきたいと思う。アカデミー版のGW９巻は、『精神の現象学』を可能な限り1807年の初版の姿のままに提供することを目指している。編集者自身も指摘しているが、初版の本文中には意味のない一行の空白が８個所入れられている[18]。私はこの８個所の空白がヘーゲルが送った原稿の切れ目ではないかと想像している[19]。もしもこの想像が正しいとすれば、最初にヘーゲルが出版社に送った原稿は「緒論」から「Ⅲ. 悟性章」の28節までである（GW9, 53-98)。28節と29節の間に一行の無意味な空白がある。29節以降の原稿は別の便で送ったのであろう。そしてこの間に「Ⅳ. 自己意識章」の構想がひらめいたのである。悟性章の29節で『精神の現象学』の本文の中で「絶対的概念」という用語が初めて登場する[20]。この同じ29節で「無限性」が成立し、30節でそれが説明される。31節で「絶対的概念」が「生命の単純な本質、世界の魂、普遍的な血」という言葉で言い換えられている。そして32節で「自己意識」という単語が初めて登場するのである。まさに**絶対的概念**と**自己意識**がフランクフルト期以来ヘーゲルの愛用してきた「生命」の内で結合したのである。悟性の最後に到達された「無限性」に導かれるかのように、生命、自己意識、絶対的概念というヘーゲル哲学の三位格がここに一体化したのである。これでもって「Ⅲ. 悟性章」は34節で終わり、「Ⅳ. 自己意識章」が始まるのである。ただし「Ⅳ」の本文中での表題は「Ⅳ. 自己自身の確信の真理」となっており、「B. 自己意識」という見出しは後で目次にのみ付けられているものである。もちろん当初から論じられている内容は自己意識論である。

（４）ヘーゲル「自己意識」の特異性

概念と自己意識とを密接な関係のもとで考察するのはカント以降のドイツ観念論の有力な潮流である。例えばフィヒテは自分の哲学の原理である自我＝自己意識の活動様式からカテゴリーを導出しようと試みていた。ヘーゲルが「自己意識章」を挿入しようとしたとき、フィヒテ流の自己意識を根源に据えてのカテゴリーの演繹の道も一つの選択肢であったであろう。しかしその頃1806年の夏頃、ヘーゲルは次のように述べている。「自己意識は自分自身を学のエレメントおよび実体に形成したのであるからして、自己意識の自己内への特別な反省は余計なことである。・・・だから概念にすぐさま自己意識の形式を与え、自分の知の対象の内で常に自分自身を想起するために、概念を例えば

自我と呼んだりする必要はないのである。」(Ros.212) つまりヘーゲルは自己意識と概念とが対峙する構造を避けようとしている。ヘーゲルとしては自己意識＝自我が対象そのものの表現である概念自身の「自己運動」に身を委ねる道を選択したのである。「自己意識は自分の真実態において自分自身の確信を有しており、この確信に立脚して〔概念の〕自由な自己運動を傍観するのである」(同、213)。というのも概念は自己意識にとって「自己」そのものであるからである。「自己意識はこの本質存在〔概念のこと〕とそれの歩み並びにそれの全体を概念把握しており、つまりは自分の自己をそれら本質存在の内に有しており、そこにおいて故郷のように安らっているのである」(同、214)。自己意識の故郷はロゴスの世界だということのようである。こうしてヘーゲルの自己意識はカント、フィヒテの自己意識から離れてゆくのである。カントのように自己意識を反省の主体として把握し、この主観がカテゴリーを利用しながら対象世界を把握するとみる見方も、またフィヒテのように行為する主体を反省することによってそこに生じているカテゴリーを導出するという見方も捨ててしまうのである。その意味で一部のヘーゲル研究者が、ヘーゲルには自己意識理論がない[21]、と批判するのも一理あると言える。ヘーゲルにとっては、自己意識と概念は反省を媒介にして相互に関係する両極ではなく、自己意識は即概念であり、概念は即自己意識である。概念が自己運動するものであるという認識を持つことによって、概念は自己意識と一体化することになった。けだし自己意識とは自我＝自我の抽象的形式に過ぎないものであり、内容空虚な無であるものである。自己意識も概念も共に「無から無を通って無に至る」空虚な自己同一性を構成する運動のリズムである。それは絶対的否定性の道であり、全ての内容を否定してゆく運動それ自身である。こうして自己意識はそれ自身絶対的概念であるが (GW9, 433)、自己意識は同時に精神でもある。もっと言えば自己意識は人倫的精神であり、人倫的精神の内でのみ生きているものである。

ヘーゲルはイエナ時代の早い時期から、フィヒテたちの自己意識、つまり自由と独立を理念とする自己意識を自然状態の内にある意識と見なしていた。ヘーゲルが常に求めていたのは自然状態を脱却した人倫の状態であった。人倫だけが精神にふさわしい自然であった。だから自然状態の内にしか存在できない自己意識なるものは取り上げるに値しないものであった。だからかくも長きにわたってイエナ時代の大半を「自己意識」なる用語を無視したままに過ごしてきたのである。そのヘーゲルが自己意識に注目し始めるは1805年からである。『1805/06年の自然哲学、精神哲学』の中には数回、自己意識なる用語が使用されている。しかしそれはまだヘーゲル哲学のうちに座すべき位置を得ていない。無理もない。自己意識は自然状態に存在するからして、上等な「精神哲学」の内に居場所を見つけることは出来ないのである。だがこの「精神哲学」の内で「個体性の原理」を「古代が、プラトンが知らなかった現代の原理」として発見することによって (GW8, 263)、ヘーゲルは自己意識の立場に大きく近づいたのである。そしてついには、先に見たように「Ⅳ. 自己自身の確信の真理」として「自己意識章」が誕生したの

である。それはカント、フィヒテの根源的統覚＝自己意識の伝統の中から成立したものであると同時に、自己意識を彼らのように反省する主観として固定することへの強い反撥から、実践的行為主体としての自己意識像へと変色させることとなった[22]。ヘーゲルの自己意識は自然状態の内に生きている欲望として登場する。そしてこの自己意識は先行する自然的意識同様に、一つの理念を持って誕生している。つまり自己意識は「自由と独立」という理念をもって自然状態の中で生きているのである。ヘーゲルの自己意識は反省の主体であるというよりも、むしろ自由と独立という理念を求め続ける人間存在それ自身なのである。自己意識は現代社会が生み出した自然的意識なのである。今やヘーゲルは自然状態から人倫への移行が「自己意識」自身によって可能であるという新しい認識の地平に立つに至った。それはまさにフランス革命の理念に立脚した社会、国家理論である。新しい「承認」の概念がその社会を可能にするはずである。イエナ初期及び中期には、各人は自己の自由と独立を民族精神の内で放棄することによって初めて、絶対的人倫と合一することが出来る古代共和主義的（あるいはジャコバン共和主義的）存在であったが、今や自己の自由と独立を保ちながら人倫的共同体を可能性とする道が拓けてきた。自己意識は類を対象として成立する個人の意識であり、そこには「我なる我々、我々なる我」という人間の共同を可能とする「精神の概念」が既に備わっている。ここで『意識の経験の学』の目標は大きくずれてしまった。「緒論」を書いていた時にヘーゲルが述べていた、意識の歩みが「精神の本来の学」と一致する（GW9, 62)、という地点はおそらくは主客の同一性の意識としての「知性」の段階を指していたであろうが、自己意識章において「精神の概念」が登場すると、その「精神」は単に「主観的精神」の領域＝知性では満足できず、「客観的精神」つまりは人倫の世界をカバーするものとならざるを得ない。しかも人倫はヘーゲルにとって「絶対的精神」をも必要とする以上、精神はそれをも視野に入れたものとならざるを得ない。『意識の経験の学』は客観的精神・絶対的精神をも視野に入れた絶対知を目指す学となる他はない。もちろんヘーゲルが「精神哲学」の分野を「主観的精神、客観的精神、絶対的精神」として明瞭に区分するようになるのは『エンチクロペディー』以降のことである。ただし内容的にはそうした区分は既に『1805/06年の精神哲学』の区分の内に存在していた[23]。既に発酵していた内容をどう取り纏め整理するかは、当時のヘーゲルの最大の課題となったであろう。しかも『精神の現象学』で取り扱う「Ⅵ. 精神章」「Ⅶ. 宗教章」は「精神哲学」におけるものと内容と形式が全く同じものであることは出来ない（両者は異なる学である)。それらはあくまでも「意識」の諸形態として叙述し得るものでなければならない。ヘーゲル自身は苦肉の策として、「意識」「自己意識」「理性」「精神」の全てを契機に押し下げて、それら全てを混ぜ合せて、文芸評論的に理性と精神と宗教の世界を描き切ったのである。その著作は失敗したとか、成功したということで評価されるべきものではないであろう。『精神の現象学』は1806年のヘーゲルだけが描くことのできた歴史的作品である。そして唯一確実なことはこの著作において**ヘーゲル哲学**が誕生したこ

とである

（5）『精神の現象学』の原稿の成立段階についての仮説

先に見たように、『精神の現象学』の初版には、無意味な空白の一行が8個所見られるが、これがヘーゲルが送った原稿の束の痕跡ではなかろうかと、私は想像している。これはおそらく余りにもバラバラに原稿が送られてくるので、用心のために出版社側が付けた印と思われる。そしてそれをヘーゲルもおそらくは追認したものと思われる。これが私の想像である。この想像に合わせて一覧表を作るとこうなる。

第一回目の送付。GW9, 53-98p.「緒論」から「悟性章」の途中まで。1806年1月or 2月上旬。ここまでの原稿には「自己意識」という用語は一度も出てこない。「自己意識章」の構想がないままに書き始められたと思われる。

第二回目の送付。GW9, 98-145p. 悟性章の途中から「観察する理性」の途中まで。3月or 4月? ここで突然「自己意識章」を挿入した。それによって『意識の経験の学』は『精神の現象学』へと変貌する道を歩み始めた。

第三回目の送付。GW9, 145-150p.「観察する理性」の途中から途中まで。短い原稿。5月頃?

第四回目の送付。GW9, 150-216p.「観察する理性」の途中から「精神的な動物の国」の第一パラグラフまで。ここまでで21ボーゲンあり、ほぼ著作の半分にあたり、1806年9月29日に再度契約が結ばれて、ここまでの原稿料の支払いがなされたようである。元々、原稿を半分書いた時点で半分の支払いをするという契約であったが、ヘーゲルは7月頃にそれを請求したが、出版社はヘーゲルの原稿が断片的に送られてくる状況なので、どこが半分なのかはっきり示してくれ、と反応したようであり、両者のモメルところとなった。この辺りの原稿が7月末頃までに送られたと想定する。なおこの個所についてはフェルスターの興味深い仮説が提案されている[24]。それによると当初はここで、先に指摘した「C.Wissenschaft」の草稿が印刷されていた。そうすればそれはまさに「理性章」のA. 及びB. に続く「C.・・・」ということになる。そしてこの「C.Wissenschaft」がいわゆる「絶対知」であり、当初の構想としては『意識の経験の学』はここで終わっていたはずであったが、ヘーゲルの気が変わって、既に印刷していたこの部分を削除して「C. 即且対自的に実在的な個体性」を置くことにして、以後原稿は膨らんでいったというものである。しかし「絶対知」に相当する部分が既に印刷されていたのであれば、そこでその著書は終わりにして即座に「論理学」の叙述に入るはずであり、私としてはその仮説を受け入れることは出来ない。むしろその草稿は1806年夏学期での論理学の講義（ここでヘーゲルは『精神の現象学』と「論理学」を講義した）の時の必要に迫られて書き上げたものと思われる。『精神の現象学』の原稿はこの頃にはまだ理性章の終わりまでしか書いていないのであるが、途中は飛ばしてでも、「絶対知」を飛ばして

は「論理学」へと移行できないので、その章だけをあらかじめ書いたものと思われる。

第五回目の送付。GW9, 216-240p. 精神的な動物の国から「Ⅵ. 精神章」の始まりの第四パラグラフまで。８月

第六回目の送付。GW9, 240-304p. 精神章のつづきから精神章Ｂ「Ⅱ. 啓蒙」の途中まで。９月頃。この頃『精神の現象学』という表題が浮かんできたと思われる。

第七回目の送付。GW9, 304-304p. 上記の終わりのすぐ後のパラグラフ⑲のみ。この⑲のパラグラフの上に一行の空白があり、下にも一行の空白がある異常な個所である。ヘーゲルがこの一枚を送り忘れてそれを後で手紙で送ったか、活字工のミスか、どちらかと思われるが、前者の可能性が高い。

第八回目の送付。GW9, 304-391p.「Ⅱ. 啓蒙」の途中から宗教章「B. 芸術宗教」の途中まで。フランス軍が迫ってきていた頃。９月下旬から10月上旬。

第九回目の送付。GW9, 391-434p.「絶対知章」の終わりまで。最後の部分を送り出したのは1806年10月20日であるが、同じ月の８日、10日、14日にもヘーゲルは原稿を送り出している。これらの原稿は全て親友のニートハンマーに送っているので、彼がまとめて出版社に手渡したと思われる。言うまでもなくフランス軍がイエナに攻め込んできて大混乱の時期であり、ヘーゲルの原稿が無事バンベルクに届いたのはまさに奇跡であった。「絶対知章」はヘーゲルが馬上のナポレオンを見た（13日）後に書き上げたものであることに留意すべきである。

第十回目の送付。こちらは空白の一行とは無関係である。「序論Vorrede」の原稿をヘーゲルは1807年１月16日に出版社に直接送っている。

すぐに書き上げられると思っていた著作が、構想の拡大に伴っていつ終わるとも思えない迷路に迷い込んだかに見えたが、それはヘーゲルの粘り強さと豊かな教養で何とか克服された。しかし時代の大きな波が、田舎の大学街を襲い、原稿の送付そのものが戦火の中を潜り抜けることになる。偶然の恩寵によって、ようやくに『精神の現象学』は日の目を見たのである。なおヘーゲルは1806年の11月から12月まで、更には1807年３月、バンベルクで自分の著作の校正に励むのである。単語レベルで多少の誤植は残ったが、文章には大きな混乱は見られない。表題と目次の区分に混乱はあったが、客観的に見れば大過なく事は仕上がったのである。この僥倖を喜びたいものである。

『精神の現象学』の構想は1805年夏頃から湧き始め、1806年１月頃になって原稿が書かれ始め、それらは出来上がり次第、順次出版社に送られて、1807年４月にバンベルクで出版されたのである。

注

引用に際しては、ヘーゲル、シェリング、フィヒテに関しては全てアカデミー版全集から引用し、ヘーゲルはGW、シェリングはAA、フィヒテはF.GAと略して、その後に巻数とページを記す。その他のものはその都度示す。

(1) K.Rosenkranz G.W.F.Hegels Leben Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1844 (1971) 以下、Ros.と略してその後にページ数を記す。

(2) T.Haering Die Entstehungsgeschichte des Phänomenologie des Geistes. In: Verhandlungen des 3. Hegelkongresses. 1934, S.118f.

(3) Phänomenologie des Geistes Hrsg von J.Hoffmeister Verlag von Felix Meiner 1952. V-XLII.

(4) O.Pöggeler Die Komposition der Phänomenologie des Geistes in: Hegel-Studien, Beiheft3, S.27-64.

(5) 代表的なものとしては、H.F.Fulda Das Problem einer Einleitung in Hegels Wissenschaft der Logik V.Klostermann 1965 (1975). Werner Marx Hegels Phänomenologie des Geistes V.Klostermann 1971. Das Selbstbewußtsein in Hegels Phänomenologie des Geistes V.Klostermann 1986.

(6) Phänomenologie des Geistes Hrsg von H-F.Wessels und H.Clairmont Felix Meiner Verlag 1988.

(7) 原崎道彦『ヘーゲル「精神現象学」試論』未来社、1994年、110-129p参照。この書は『精神の現象学』の成立に関しての数少ない本格的論考であり、参考にさせて頂いた。

(8)「絶対的意識」は『自然法論文』でも使用されている（GW4, 462, 464)。それはシェリングも1802年の『ブルーノ』等で使用している用語である（A.A.11, 379p)。同一哲学期のヘーゲルとシェリングの愛用語と言えるものである。

(9) 金子武蔵は『精神の現象学』上巻、岩波書店、昭和46年、579pでこの個所に注を付けて、「絶対的意識」が①の草稿で使用されていることを指摘している。金子ならではの学識溢れる研究姿勢に感嘆を禁じ得ない。

(10) Hegel in Berichten seiner Zeitgenossen. Hrsg von G.Nicolin Felix Meiner Verlag, 1970, 64p参照。以下、この書からの引用はZ.と略してページを記す。

(11) 講義延期の下書き、一つは清書稿で、一つは草稿、が二つあり、ホフマイスターはヘーゲルが二度講義を延期したと解釈している。ホフマイスター版 Phänomenologie des Geistes. XXXIp参照。

(12) 拙著『ヘーゲルのイエナ時代　生活編』文化書房博文社、2012年、147-8p参照。

(13) 拙著『ヘーゲルのイエナ時代　理論編』鳥影社、2019年、345-355p参照。

(14) 1802年のヘーゲルたちは次のように主張していた。「哲学はその本性からしてある種、秘教的なものであり、それ自身としてはペーベルたちのために作られたものでもなければ、ペーベルたちのために調合してやることも不可能なのである。」(GW4, 124)

(15) 弟子ののK.L.Michelet及びローゼンクランツもそう言っている。前掲Z.76p, 及びRos.204p参照。

(16)「概念の自己運動」という表現が登場するのは『精神の現象学』の「序論」が最初であるが、「自己運動」という言葉自身も「序論」において初めて現れる。『精神の現象学』を書き始めたころにはヘーゲルは概念の自己運動ということを明瞭には自覚しないままに、叙述を進めてゆき、絶対知まで書き進めた後に振り返ってみて、それを自覚したということになる。『精神の現象学』はまさにあらゆる面からしてヘーゲルの「発見の旅」なのである。

(17) 前掲拙著、『ヘーゲルのイエナ時代　生活編』166-9, 206-7, 231-246p参照。

(18) GW9, 98, 145, 150, 216, 240, 304, 304, 391.

(19) そのように考えるとき、困るのは上記に見られる304pに二度も空白の一行が入っていることであるが、ヘーゲルが送り忘れて追送した一枚なのであろうか。

(20) これは『精神の現象学』の本文においてということであり、言葉としては『信仰と知』や『自然法論文』などにも見られるところである。GW4, 358, 464参照。

(21) コンラート・クラマーと飛田満はヘーゲルに厳密な意味での自己意識理論が欠けていると指摘している。飛田満『意識の歴史と自己意識』以文社、2005年、248p参照。クラマーの説はH-S.Beiheft11, 1970（1983）年、537-603pに収録されている。

(22) フィヒテも実は自我を単に反省の主観としてではなく、「生命の原理」として、全実在性としても把握しているが、『全学問論の基礎』では生命としての自我は感情、衝動、憧れとして展開されている。F.GA. I .2, 406-7, 424-5, 447p参照。ヘーゲルの自己意識論はフィヒテの自我論を参考にしながら、自己意識をより実在的な場面（自然状態から法状態への移行）で描いたと言える。もちろんこの構想もフィヒテの「承認」の概念に依拠したものである。

(23) 主観的精神に該当するのが、「Ⅰ. その概念からする精神」であり、客観的精神に該当するのは、「Ⅱ. 現実的精神」と「Ⅲ. 体制」であり、絶対的精神に該当するのは「C. 芸術、宗教そして学」である。もちろんここにはヘーゲル自身これから解決しなければならない問題が、いくつか含まれている。

(24) E.Förster Hegels Entdeckungsreisen. Entstehung und Aufbau der Phänomenologie des Geistes in : Hegels Phänomenologie des Geistes Hrsg von K.Vieweg und W.Welsch Suhrkamp.2008. 37-57p参照。